

野崎廣義著 『懺悔としての哲學』

伊 達 四 郎

本書はもと『無窓遺稿』として少數知己の間に頒たれたものを一部割愛の上ふたび版に附せられたものである。著者は今より二十五年前、二十九歳の若さを以て溘焉として逝いた人、西田幾多郎先生門下中、大折して其の英才の惜しまれた三人のうちの一人であり、而して其の死が先生をして「余にとつて自己のいからかゞ奪ひ去られたやうに思はしめた底の人であった。

同じく西田先生の跋文に「君は學者として立つに十分なる思索の深さと鋭さを有して居たのみならず、君の根柢には君自身にも照し得ざる深い或物があつた。云々。」とあるが、洵に著者と、そして哲學その

ものの眞諦とを一言に盡されたものと云ふべく、「永へに我に知られざる一物」のあるを體認告白せる著者は、まことに屆き難く思はれる心の深い底を嘆きもて求めて已まない西田哲學を其の根源に於て繼ぐに足りる一人であつたであらう。このことは然し、著者が西田哲學の學的立場に安住し、それを繼承祖述する亞流に止るが如き人であつたであらうと云ふのではない。師の足跡を追ふだけではなく、師の心を心としてゆくが如き人であつたであらうと云ふのである。そして此の事が最早ただの模倣でないことは、今更いふまでもなからう。無論、本書所收の専門的な論文二三は『自覺に於ける直觀と反省』の立場で書かれてゐるかと思

はれるが、問題を取扱ふ態度の *enduring* などころに著者自身の思索の自主性を見ることが出来るのである。そして思索の徹底性・自主性は何よりも先生のものである、と共に、それは亦た著者自身のものでもあつた。かゝる點に於て先生の影響感化があつたとすれば、それを與へ與へられたところの師弟共々の偉さがあると云へよう。

哲學の大道は眞實一路である。哲學の窮極の對象は絶對的なものであると共に、それは單に物として哲學者の外にあるのではなく、むしろ常に彼に於て何らかの意味に於て生きられ臨まれてゐるのでなければならぬ。無論、そのことは、絶對的なものが哲學者にとつて全く認識されてゐるとか認識し盡され得るものであるとか云ふのではない。哲學者とその探求の對象たる絶對者との間には遂に解決し難い矛盾があると云はねばならぬ。それは哲學そのもののうちに潜むアポリア

であり、その自覺の上にこそ哲學は成り立つと云ふべきであらう。直接には知られてゐて未だ認識せられてゐない内なる絶對者を尙ほ認識しようとして、しかも常に絶對者より彈き返されるといふ矛盾の自覺であり、その自覺の徹底である。そして矛盾の自覺は最早たゞの矛盾ではないのである。かゝるプロメテイ斯的苦行の反覆そのものが單なる反覆ではなくして常に新生であり創造であることを知ることが、哲學の根本精神であらう。所詮、哲學は人間の道であつて神の道ではない。信に於て救済が成就するならば、知は罪惡、原罪である。哲學の追求する内にして外、外にして内なる絶對者は、神ならぬ惡魔であるかも知れぬ。しかし、これを目標とし、これと惡戰苦闘することなくしては、眞理の現れないといふのが、眞理の嚴肅な掟である。この掟に従ふ限り、哲學が信ならぬ知の途を歩むとも、神はそれを許すのではあるまいか。眞に絶對

的なものはやはり惡魔ではなくして神なのであらう。哲學と宗教とはやはり通するのであらう。しかし哲學は飽くまで知の立場に立つ。たとひ其の知が單なる對象知や教養知でなく救済知であらうとも、知の立場に立つ。その限りそこには神の絶對的な許しはやはりあり得ぬかも知れぬ。知は遂に原罪を出でない、と云へよう。「眞に考へるものは皆罪人でなければならぬ」と著者は云つてゐる。しかし原罪に徹すれば、そこに光がさし出ぬでもあるまい。著者も「涙が笑ひ、闇が輝く」と云つてゐる。知と信とは途を異にするにせよ、やはり哲學は惡人なる故にこそ救はれると云ふ宗教の「不可思議」と趣を同じうしてゐる。絶對的なものを知ることは祈りであり、祈りは反面に懺悔である。しかし繰返して云へば、「懺悔としての哲學」は懺悔の宗教ならぬ懺悔としての哲學として、直ちに宗教に赴き得るものでもなければ、赴かんと欲するもの

でもあるまい。哲學の徒は結局不信の徒であるであらう。しかし魂の底に自らも屆き難く照し難い或物を抱くところに成り立つ哲學の徒は、まさに其故に單なるパリサイ人ではなからう。「眞理は決して許さぬものである。」このことを謙虛なる哲學は心得てゐるのであり、其故に哲學は純粹にして眞劍、言ひ換へれば、徹底的であり得るのである。もし原罪であるところの哲學にとつて何らかの恩寵があるとすれば、それは「眞理によつて自己の罪惡の遂に許されざるを知るところを許される」といふことの外あるまい。かゝる言葉は吐き得るといふことは洵に生易しいものではないのであるが、本書所收の日記とその結晶たる巻頭の一文『懺悔としての哲學』とは、かゝる著者の肚裏より發した生々しき且つ深味ある言葉で以て滿されてゐるのである。

人間の無力に徹して神の途に躍り上つたキエルケゴ

ールと人間(超人)の有力に徹して狂氣を得たニイチエ——その孰れが正しいかは容易に決し兼ねる問題、否、恐らくは無意味な問題であるが、哲學そのものは兩者の止揚統一せられるところにあるのではなからうか。相去ることの遠きこと兩者に如くもののない如く、相近きことも亦た兩者に如くものはないのである。それは又た宗教と哲學との關係でもある。そして是等のデリケートな關係の止揚統一が可能であるとすれば、それは、哲學が正に文字通りの懺悔としての哲學、單なる懺悔でもなければ單なる哲學でもなき、正に懺悔としての哲學として、自覺的に「自己全體を無底坑の中に投げ込」み、「無底坑の暗からすべてのものを見る」といふことの外ないであらう。こゝに自覺的に自己を投げ込み、見るといふのは、單に沈湎苦惱するといふことではない。無底の深淵は物として無自覺に泥まれるが如きもの、物に即して無自覺に泥み

つゝ墮ちてゆけるやうなものではない。それは内に超越せる「知られざる一物」であり、其故に又、その知られざることを自覺せしめ見せしめる一物でもある。もし此の一物の單に外的ならぬ内的超越の超越性を徹底し、内的超越を媒介にして再び外的超越に突破還歸しようとするならば、かの一物は實は物や人格でもなければ神でもなくして、却つて絶對無と呼ばれるべきものであらう。そこに超へらるべき人間の無力を洞察したキエルケゴールと超えた人間(超人)の有力を擁護したニイチエとを止揚統一する途があり、そして『懺悔としての哲學』の著者はその師と共にその途を豫感してゐたと見ても、強ち不當ではあるまいかと思ふ。

まことに齡三十に滿たずして逝いた著者の『懺悔としての哲學』の小やかなる一文は絶望の果てに辿りついた哲學であり、哲學的精神そのものである。それは哲學と稱するには餘りに苦惱の體驗の生々しいもので

ある。著者は未だ「無底坑の中からすべてのものを見出す」ことを原理とし、その原理によつてすべてのものを見、考へてゐるのではない。その機會に恵まれるには餘りに早く逝いたのであつた。しかし、暗黒の中に陷つて尙ほ光明のまばゆきを欣んだ、*„De Profundis“*の著者の欣びに對して、光明の裡に在つて暗黒の壓迫を自ら嘆かざるを得ず、この對決に於て自己の途よりワイルドのそれに翻身して、哲學の始まりを驚異ならぬ無限の悲哀として自覺し得たといふことは、もはや單なる才智のみの藝當ではないのである。また若し、絶對無を哲學的原理とするといふことが哲學者の實存そのものによつて裏附けられなければ、それは單に抽象的な原理に化し終るとも云へよう。實存の根據としての絶對無は單に説明の原理であつてはならぬ、創造のそれではなければならぬ。それによつて實存たるものでなければならぬ。と共に、絶對無の創造性は實存そのものによつて實證せられる外ない。而して實存の必要なる契機は *unverfügbar* なる絶對無に對する其自

身の *unzulänglich* たる自覺にあるであらう。絶望なくしては新生はあり得ない。歴史の厳しい現實も文化の危機も、それを單に外に置いて、抽象化されるが如き絶對無の原理によつて理解するに止るならば、未だその真相に觸れぬと云はねばならぬ。哲學は本來 *„analogia hominis“* といふところに成立すべきもの、哲學者は本來「内からして哲學者」(ジンメル)でなければならぬ。そしてそれは、外なる對象を内に於て體驗濾過して内面化することであると共に、内に生きられ臨まれるところの實存的根據を單なる抽象的原理として外化するに止つてはならないことを意味する。現實の深處を尋ねようとするならば自己の深處に探る外ないと思はれるが、西田・田邊兩先生の如きは扱て措き、端的には本書がそれに對する一の指標を示してくれてゐることを信じて疑はないのである。

「己が考へを書く時は遺言狀をつくるが如き心持ちですべきである」と日記に記されてゐる。一文『懺悔としての哲學』は正にその意味に於ける遺言狀であつたと稱してよいであらう。